
永遠の力を持った現実憑依者

ラグエス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の力を持つた現実憑依者

【Zコード】

Z0681M

【作者名】

ラグエス

【あらすじ】

一人の少年の名前『阿木坂千歳』という
目が覚めると白い空間に居た。

すると、謎の声が説明してくれた。

どうやら、その少年の世界はブラックホールに飲み込まれたらしい。
そして、謎の声がその少年を何かの理由で選び、能力を持たせて（
？）別の世界に送り込んだ。

目が覚めるとユーノ（フェレット）の姿だった。

そこから、この少年はその世界に干渉する事が、

田舎に好んで勝手をする所でもある。

第1話『始まり』（前書き）

このＳＳは別世界の能力、現実憑依、原作知識あり、最強設定の主人公です。

第1話『始まり』

俺の名前は阿木坂千歳。

なぜ千歳といつてお前のかといつて、

よくある話だ。

昔、なんぢやらなんぢやらが起つて、それを食い止めた英雄やらなんぢやら。

覚えてないから、説明は勘弁な。

それについても、今いる場所がおかしいんだよ。

「アレ? なんだ? 周りが白い」

どこの見回しても白い空間で広がっていた。

おわりくは終着点（入口の事）も存在しないだらう。

「まいったな。朝起きたらこんな所にいるし意味が分からぬ」

どうすればわからなくなつた俺は寝転ぼうとするが聞こえた。

選ばれた。お前は選ばれたのだよ。

この空間に響き渡った声主を突き止める為、周りを見るが誰もいない。

まさかと思い、上を見るも誰もいなかつた。

「気のせいか……」

お前は選ばれし存在。永遠の力、お前の知る知識を実現化、そして……選ばれた役目をくれてやる。」

「いや、ちょっと待てよー。そんなものいらねえから家に帰らせろ！」

お前の世界は既に消えている。永遠の力を持つて、世界を渡つてもういい。それがお前の役目。

「つて人の話聞けよ……つて俺の世界が消えるだとー!?」

地球と月の間にブラックホールが発生し、周辺の惑星を全て飲み込んだのだ。

偶然、その空域を見ていた私は強大な萌え力を持つお主を見つけ、こちらに転移したのだ。

「も、萌えー!？」

何を言い出すかと思えば、萌え力って何だ？

確かに漫画とかアニメ、ライトノベルは好きだが、それは一体どういう意味だ？

だから言つたはずだ。お前は私に選ばれたのだ。光栄に思つがいい。アニメの世界に行かせてやるのだから。

……。

「これってまさかよくあるシチューレベルの現実憑依者か？」

私は忙しいのだ。詳しきは後で説明する。選ばれし者よ。わいばだ。

「いやいや、ちょっと待てよー。話がよく……」

そう言いかけた瞬間、かなりの眠気が襲つて来て、耐えきれなかつた俺の意識は闇の中に沈んだのであつた。

一体、あの声は何者なんだよ……。

／？？？？？？＼

ようやく目が覚めた俺は起き上ると、体の構図が違つ事に気付いた。

「つー? なんで俺はユーノになつてゐんだー?」

つい叫んでしまつた。

叫んでもしまうのも無理はない。

だいたい、なぜユーノってわかつたのかつて?

「隣に寝ているなのはがいる。無印世界なのか」

慣れない体を動かし、どうやつたら人間に戻れるか頭の中を探つてみる。

すると、ユーノの情報が頭の中に流れてくる。

「うむ、なるほどね。つて何これ……」

ユーノの情報を見ていたら、いきなり別の情報が一気に入り込んできた。
その情報とは何かって？

「本当に俺の知ってるアニメやゲーム、ライトノベルの全てが使えるんだな」

なのはの技はもちろん、某大戦や某魔王に某龍玉、某光の翼など。
某光の翼つてのはあれだ、自称宇宙一天才科学者がいるや物質変換できる方。

「それにしても、よく寝てるなあ

まだ俺はフレットだぜ。

すうすうと子供の様に寝息を立てているのはを見ていたが。

「Uの姿でいるのもなんだし、叩き起してから俺の正体をばらすか

俺の正体をばらすってのはユーノが男だつて事をばらすだけ。
別に、俺の存在自体をばらす意味はないだろつ。

「やうと決まれば

俺は小動物の運動性を利用して、なのはの首からぶら下がっている
レイジングハートを発動させる。
なのはじやないと起動できないのに何で起動させれるのかって?
そういう能力が俺にあるとしか言えない。
すると、なのはのパジャマから魔導師の姿に変わった。

「よし、転移魔法発動」

場所はどりあえず、ユーノの記憶を利用してそいつの公園に座標を
合わせる。

なのはと俺だけの小さな魔法陣を展開して転移した。

「近所の公園」

近所の公園に人払いの魔法陣を展開。

ベンチになのはを寝かせているが、起こそうか。

「なのは、なのはー」

「うう~、あともうちょっとアレー?」

バツと体を起こしたなのはが周りを見回す。
見回した後、不思議そうにしていた。

「なのは、ちょっと話があつてここに転移させてもうつたよ

「ええ! ? あ、そんなんだ……」

なのはは一度驚いたが、何か納得したみたいだ。

「なのは、僕ね、実は人間の男なんだ」

「え、そうなの！？」

またもや驚いてくれた。

つてか、原作のユーノもぱらすの忘れるなよ。

「じゃあ、証拠を見せるよ」

「う、うん」

俺は人間に戻るため、元に戻る呪文を起動する。
呪文と言つてもそう念じてるだけなんだけどね。
俺の体がフェレットだった大きさがなのはよりちょっと大きめの身長になった。

「ふわあ、男の子なんだあ」

頬を赤くしているなのはがいた。

「ごめんな。何か騙したみたいで」

「ううん。別に良いよ。私も無理言つたから」

記憶の中を見てみるとその通りだつた。

ユーノを無理やりにでもなのはがつて強引にしたらしく。原作とちょっと違つけどまあいいか。

「なのはは魔法の特訓した方が良いよ」

「うん。それは良いんだけど今何時なの？」

「今は5時ぐらいじゃないかな?」

「ええっ! ? まだ寝たいよ」

眠たそつに田を擦つてるなのは。
だが、ここで鍛えておかなければフロイトビツ勝つんだ?

「一応、デバイス起動させたからやつてこべよ」

「うん」

よしよし、素直になつてくれた。
俺の力を試すのにもちようどいいにか。

「でも、ユーノ君はびつやつて訓練させよつてこいつの?」

「ああ、僕はもう一つの『トバイス』やるから」

「もう一つー?」

「そう、ちょっと待つてね。これ出すの、レイジングハートより面
倒だから」

「うん」

正確には今から作り出すんだけどね。
どんなデバイスにしようか。

うーん、よし! 少しだけ実験型デバイスとしてやつてやるわ。

「私はユーノ・スクライア。レイジングハートをしてやつてやるわ。
と存在を融合し、デバイスとなれ」

俺は融合するモノを想像しながら、空中に魔法陣を開く。
その魔法陣からなのはのレイジングハートと同じ形が出てきた。
すると、役目が終わったかのように魔法陣が消え去った。
空中に浮いているデバイスを左手で持ち

「我がデバイスの名をレイジング・エターナルとする
くわかりました。マスターユーノ」

デバイスの宝石部分から返事がきた。

「それがユーノ君のデバイス……レイジングハートと同じなんだけ
ど」

「形だけはね」

だが、このレイジングエターナルのは特殊能力が存在する。
俺の融合させたモノとはネオ・グランゾン経由とアストラナガン経
由全てなのだから。

経由とはグラントン、ディス・アストラナガンなどを含む。
ぶつちやけ、ブラックホールも撃てちゃうというデバイスだ。

「じゃあ、やってみようか

「う、うん」

俺となのはは一定の距離を取り、デバイスを構える。
そういえば、なのはってダイビンバスターって撃てたつけ？

「アクセルシューター」

なのはがアクセルシューターを100の光を出してきやがった。
つて100つ！？
この世界のなのはってインフレしてんじゃないの！？
それなら問答無用だ。

「なのは、避けられるものなら避けて見せろ。ワームスマッシュヤー

もちろん、手加減のワームスマッシュヤーだ。

小さな黒い穴が開き、その中に只の魔弾を打ち込む。

100つ魔弾を打ち込んだ後、穴は閉じる。

俺の行動に戸惑っていたなのはだが、真剣な目で俺を見てアクセルショーターを発射させる。

「100はコントロールが難しいだろ」

むしろ、今のなのはでは無理だろう、と背後にある大きな木を盾にする。

しかし、こちらに向かってくるなのはのアクセルショーターが周りに分散し、俺を囲んでいた、

「コントロールが出来てるだと…？ ならじょーがないな」

俺は笑みを浮かべながら指を鳴らす。

なのはの眼では見えない速度で100のアクセルショーターの前に黒い穴が出現し、魔弾を当てる。当たった瞬間、爆発を起こす。

俺は転移魔法を利用して、爆発の衝撃を防ぐなのはの後に回り込みデバイスの先を背中に突き付ける。

それを感じたなのはは驚きの声を上げ、

「うへ、降参だよ」

「良い判断だね。もし降参しなかつたらセツキの攻撃を直接与えたのに」

俺の言葉に青ざめたなのはは安堵の息を吐いてこう言った。

「降参してよかつたあ。でも、今の何なの？」

「今の？ ワームスマッシュヤー、ワームホールを利用して、その中に最大10万の魔弾を入れ込み、360度攻撃や時間差攻撃もできる高度な魔法さ！」

「そんなのがあつたんだ。前はそんなの無かつたのに」

「前？」

「つづく、何でも無いよ！－！」

顎に手を添えて眩いだのは尋ねると、必死な表情で否定してきた。

前つてどういう意味なんだ？ とも考えたが、ビリでもよくなつた。どうせ意味もない事だ。

「そろそろ部屋に戻らないとお母さんで何言われるか

「やうだね。僕はどうじよづか」

「あ、そうだったね。ユーノ君、男の子だもんね」

フレットの姿を想像してたながら苦笑する。

もう動物の姿にはなりたくないんだよな。

ショーガニ。デバイスをグラソソンに変形して、その中で住むか。そう考えていた俺なのだが、ポンと手を置いたのがこんな事を言つだした。

「じゃあ、お母さん達に理由を説明して泊めてもらひやうつへ」

「何で？」

「ユーノ君、住む家ないんでしょ？」

「いやさすがに、男だとまづい」

「私に任せて」

任せてつて言われてもなあ。

まあ、グラソソンに変形させた方が絶対良いのに。

そこなら好き勝手に干渉てきて俺的には完璧なのだが。

満面の笑顔のなのはがそこまで言うなら仕方が無い、か。

「わかつたよ。交渉は任せる」

「うん。じゃあ早速行こうか」

「ああ」

なのはに感謝を込めて笑顔を向ける。

すると、なのはの顔が赤面状態になり、小さい返事がきた。

「う、うん」

俺を先頭になのはの家まで歩いて行つた。

第2話『ユーノとなのはが高町両親、おまけの兄説得とフロイトに

会つ』へ

第1話『始まり』（後書き）

もう一つのUUS（全ての終端）を最優先とするため、IISのUUSの更新速度はちょっと遅いです。

たまに、速い更新の時もあります。

6月中はもう一つのUUSを1回更新という形でUUSを1回更新予定。

第2話『フュイトと接触』（前書き）

時間軸が滅茶苦茶だつたり、原作にはない展開があります。
逆行ネギより早く出来てしまつた……。

第2話『フュイトと接触』

なのはの家に戻り、なのはが一生懸命に俺の事を説明していた。両親からは僕を観察する視線が突き刺さるが、なのはの必死さに頷いていた。

時間がかかると思つたけど、あまりからなかつたみたいだな。

「ユーノ君」

あの様子だと説得が終わつたのか?
嬉しそうな表情でこけらにて戻つてくる。

「お母さん達が良いつて
「あ、そつなんだ」

どうやつて説得したのか聞いてみたいな。

……別にいつか。

今の俺はユーノだからな。

それに、この世界はなんたつてアニメだし問題ない。

「これで一緒だね」
「でも学校には行かないよ?」
「ええ!？」

小学生からやり直すのは面倒なんだよ。

一応、元大学生なんだよな。

19歳だったからしょーがないが。

「わかつたよ。でも私が学校に行つてる途中どうするの?」

「ジュエルシードを探すさ」

「ああ！ 手伝いたいなあ！」

強講る様な声色で俺に聞いてくる。

「いや、それほどのことはござん

早し返事だつた

「やうこそ、今田せ？」

「田舎様ある」

「ル、ル」

両親に言つてから、外へ出た。

森の中

ここにジュエルシードの反応がした。

まったく現れる場所も違うから役に立たないんじゃないか？

「これは、発動する？」

木は普通とは考えられない早さで成長していった。

「結界発動」

俺の力で結界を作り出した。

別にデバイスやこの世界の魔法でやる必要はない。
ここを中心から100メートル範囲の紫色の結界ができる。
もちろん、普通の人ではわからない。

「上出来か」

うねうねと根を動かす目の前の化け物は声を張り上げる。
リアルで見ると、物凄く気持ち悪い。

吐きそうになつてぐる。

「ウオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

「ああひるせいな。これでもくらうとけ」

デバイスを使おうとした瞬間、黒いマントを着た金色の髪をした女の子が背後から

「サンダーレイジ！」

攻撃していた。

化け物の木にヒットするが、あまり効果がないようだ。
雷属性は効かないのかな？

「何で……まあこいつか。おい！　そこの金髪」

「あ、あなたは」

「俺はユーノだ。君は？」

「あなたに名乗る気はないね」

犬の耳をした女の子が隣に来ていた。

だが、

「私はフェイト、フェイト・テスターッサ」

「じゃあ、俺はコーノ・スクライア」

「気楽に自己紹介なんてしてる場合?」

うねうねと僕の方に根が飛んでくるが、デバイスを起動させ、後方に下がる。

「「」」いつを倒すか

「どうするの?」

「見てなよ」

杖の先を木の化け物に向けて20発分の魔弾を撃つ。撃った時点で既にヒットしていたがしぶとく生きていた。

「完全消滅させるか。マイクロブラックホール発射

黒い重力玉をぶん投げると、またもやあまりの速度で木に当たる。接触した事で、黒い塊が大きくなつていき、木もろとも飲み込んでしまった。

これにより木が消滅したのであった。

「……」

「……」

「……しました。ジュエルシード1個消滅しちゃつた」

フェイトとアルフが唖然とその光景を見ていた。

ふむ、出力をもう少し手加減してあげれば良かつたかもしれない。
マイクロとはいえ、巨大化した木を軽く飲み込むのだから当然、ジ
ュエルシードも消える。

その事を計算してなかつたよ。

「これはこれでいいか

と行こうとした所、2人の少女が道を塞ぐ。

「待つて」

「ジュエルシードが消えたじやないか」

「何の用？」

「あなたは魔導師？」

「違うよ。俺は……」

何だらうな。あの謎の声が永遠の力やら言つてたな。
ならば、俺の創つた名称を聞かせてやる。

「俺は永遠なる者。縁があればまた会つだらう」

フェイト達を無視して、なのはの所に向かつた。

数時間適当に歩いていると、なのはがいた。

「なのは」

「あ、ユーノ君、どうしたの？」

「ここでは駄目だ」

「公園だね」

二人でいつもの公園に向かつた。

公園のベンチになのはが座り、俺は向かい合わせになる様に立つ。とりあえず、木が大きくなつて暴走していたという事だけ言っておこうか。

「ジユエルシード一個消滅しちゃつた」

「えええええええーーー？」

予想した通りの反応、ありがとう。

「後、フェイトと名乗る子と出会つた」

「フェイツー？ えと、そなんんだ」

「勝負はしていないけど、ナノはの方が上だと思つ。火力は」

「どうなんだろう。ユーノ君は戦つたの？」

「戦つてない。逃げてきたからな。きっと挑んでくると思つ

「私、その子に会つてみたいなあ」

「じゃあ、ジユエルシード一緒に探すか」

「うん」

嬉しそうだった。

なのはとフェイトは親友だもんな。

ジユエルシードが一個無くなつた。

これでどうなるかな？ 物語はどう動く？

「……どうしようか」

「そりだね……ってあればー!？」

なのはが驚愕に満ちた表情で林の方を見ていた。

俺もなのはの視線の先を見ると、

「はあつー? 巨大な猫?」

「ええええええええ! ? ちょっと早すぎだよーー! ?」

「何が早すぎなの?」

「な、な何でも無いよー! ?」

なのはが俺の質問を慌てて無かつた事にさせた。本当に何なんだよ。

「で、どうする?」

「どうするって言われても止めるしか」

「まあ、ジューエルシードが原因なのは見ての通りか

「そうだね」

すると、なのはがデバイスを起動させて、魔法少女の姿になる。レイジングハートを左手で持っている状態。

「いくよってユーノ君?」

「どうしたの?」

「ユーノ君はデバイス展開しないの?」

「無くともどうとでもできる。それに、なのはだけで充分だひつ

「そりなんだ。じゃあ私、行ってくるね

頷いたなのはが巨大な猫の方に飛んでいった。デバイスはあくまでおまけだからね。

全グランゾン、アストラナガン経由の全部武器を使用できる上、
なのは世界の全魔法を使用できる程度のレイジング・エターナルか。
原作崩壊する気がする。

「あはは、ん？ あれは」

巨大な猫がさらに大きくなつていいく。
おかしいなあ。俺の眼の錯覚か？

「何で推定30メートルもあるんだろうか？ なのはの魔法を吸わ
れてるのか？」

状況を見てみると、
なのはのアクセルシューターが猫にヒットした途端、ちよつとびづつ
大きくなつていた。
あのままではどうみても無駄な気がする。
成長させてどうするんだ？ なのは

「行くか」

とりあえず、俺は巨大な猫の方へ向かった。

「ミヤ～～～～～ン」

「くっ！ 魔法が吸われてる？」

「そうみたいだな」

「ユーノ君、ビうじょう」

「ジュエルシードを狙うしかないね」

「ジュエルシードは猫さんの胃袋の中だよ？」

猫さんってなのはの性格、変わってる気がする。

「魔法じゃなければ攻撃は可能か?」

「私、魔法しか使えないよ?」

「空間破壊できる魔法とか無いの?」

「あ、あるけど……今ままでできるかどうか」

「あるんなら使うしかないと思つ」

スターライトブレイカーを撃てるのか。

俺の知ってるなのは世界とは大分違うようだ。
まあいい。俺が対処してもいいが、ジュエルシードを減らす訳もい
かない。

「じゃあいくよ」

なのはがレイジングハートを構える。

「スターライトブレイカー……！」

なのはの声と共に解き放った。

魔法が猫にぶち当たった瞬間、

「レイジングハート、ジュエルシードナンバー・ランダム、封印開始」

ランダムって何だよ……このプログラム、原作にあつたっけ?

なのはのデバイスがジュエルシードを引きびり出した。

胃袋の中にあつた物体を透過させて回収するなんてな。

俺は今後のなのはがどこまで強くなつていいくのか楽しみになつてい
た。

「ユーノ君、ジュエルシード回収したよ」

なのはの手には、ジュエルシードがあった。

へえ、こんなに小さいんだあ、と実物を見た俺は感動する。ほら、アニメだと美化されてる可能性があるだろ？

目の前のなのはもフュイトもかわいいから別に良いけど。あくまでかわいい、だからね。

「ユーノ君が持つてる？」

「なのはが持つてなよ」

「じゃあそうするね」

レイジングハートの中にしまい込んだ。

「セヒト」

「待つてぐだねー」

「え？」

「あれは……フュイトか」

「」は林の中だから木があちこちに立つてゐる。一本の木の上にフュイトとアルフがいた。

「フュイトちゃん！？」

「つ……むしかして、なのは？」

アレ、もうお知り合いでいたのですか？

なのはと共に行動してなかつたからむづ念佛かもしれない、と解釈した。

「フュイトちゃん、どうしてここに？」

「ジュエルシードの回収かな？」
「何？」

「……何でも無い。それよりなのは、ジュエルシードを渡してほし
い」

「駄目だよ」

「！？ どうして……」

「だつて、危険だもん」

「全部集めればお母さんの夢は叶うの」

全部つてもう全部は無いんだけど。

「一つだけ聞いていい？」

「何？」

一応、確認だけはしつかないとね。
なのはの実力も今日だけでフュイトと会つ回数も多いし。
共通点だけは見つけないと。

「君の母親の名前は？」
「プレシア」
「そつか。……なのは」
「え？」
「ジュエルシード、ちょっと貸して」
「うる」

なのはからジュエルシードを受け取り、俺の魔力を注いでやる。
なのは達に感知できないよう気配を遮断して、なのはとフュイトの
間に投げた。
すると、ジュエルシードがピタッと止まる。

「それあげるよ」

「ユーノ君！？」

「なのは、ジュエルシードを集めるの大だけど、フェイトを助けてあげないと」

「そ、そうだね」

だが、俺やなのはの隙を狙つたかのように、アルフが真ん中にあるジュエルシードに触れる。

正確には回収しようと取るだけだ。

ジュエルシードが光り出した瞬間、捕縛魔法陣でアルフが捕縛された。

「何だこれ！？」

「アルフ！」

「フェイト、大丈夫だよ。こんなの」

力を込めて魔法陣を剥がそうとするが無駄だ。

その捕縛魔法陣はヴォルクルスの呪縛とほぼ同じだ。

「ユーノ、アルフを放して」

フェイトの言葉を無視して、アルフの前に瞬間移動する。

「フェイト、条件がある

「条件？」

「うん。全部で二つあるけど聞く覚悟は？」

「わかった

「一つ目、ジュエルシード回収をなのはと共にに行う事。

二つ目、フェイトが回収したジュエルシードはフェイトの物だけど、

なのはが回収した物はなのはの物だ

「……わかった。3つ用は？」

「それは今後伝えるよ」

「今じゃ駄目なの？」

「今は何もないから」

「うん。それでいいよ」

交渉成立したら、捕縛魔法陣を解除した。
アルフが俺を睨んでいた。
あんな事をされて当然か。

「ユーノ、あんた後で覚えてなさいよー！」

「事象の地平面に追放されたかつたらどうだ？」

「何よそれ……」

アルフが疲れた表情で額に手を当てる。

俺の言つてる事で疲れてるのか、俺と話すのが疲れるのかどっちだ
ろうか？

「それよりも用は終わりじゃないの？」

2人はまだ帰らないでいる。
どうしたのかな？

「なのはと行動するんでしょ？ だつたら

「そうか。なのは！」

「……え？ 何、ユーノ君」

「フォイトとアルフをなのはの家に居候

「フォイトちやんと！？」

かなりの声で驚き叫ぶなのは。

「女の子だから簡単に説明できるでしょ？」

「うそ。よろしくね。フハイトちゃん、アルフさん」

「なのは」

「ふう……」

なのはとフハイトは仲良く握手していた。

その光景を溜息を漏らすアルフ

これでいいのかなあ。フハイトを『ひかり』の陣に引き入れるのが目的。
でもおかしいな。こんなにあつたうど成立する訳ない。

「じゃあ、なのはの家に戻るか」

「うそ。こり、フハイトちゃん」

「うそ」

なのはとフハイトは先になのはの家へ向かった。
この場に残った俺とアルフは『氣まずい』空間になる。

「ねえ」

「アルフ？」

「あんた、強くなつてない？」

「何を言つてるの？」

「ふうん、なるほどじね。だからか……」

アルフが顎に手を添えてうそうそと頷き、皿口完結していた。
何を言つてゐるのかさっぱりだ。

でも、なのはの『前』といふ余話は関連しているかもしれない。

「私もそろそろこへか

「あ、俺も」

完全にゴーノのくせに俺になつてゐるナビ^{ナビ}氣にしない。
あくまで俺は俺と証明するために。

俺達は目的地へ向かつた。

「なのはの家」

両親には既に話して成立しているようだ。

聞いてみると、なのはの右隣の部屋なんだそつな。

ちなみに俺の部屋は左隣だつたりする。

つか、なのはの家がアニメよりも広いのは氣のせいですか？

「アルフ、ここだよね？」

「うん。フュイトつて書いてあるし」

なのはの字でフュイトちゃんハートつて書かれている。

ドアをノックすると、ドアが開いて中に入るよう勧められた。

中に入ると、何時の間にか荷物が転移魔法で出てきた。

誰かに見られたらどうする気だ？

そう思いながらも壁際にもたれて座る。

「なのはのお母さん、優しいね」

「うん」

「つべつあるのは？」

「私とアルフ」

「一緒に寝てないんだ」

「そんな年齢じゃないし」

「うん」

女の子同士は別に良いんじゃないかな？ 百合的な意味で。アニメの3期でなのはとフロイトとはやてが……つていづシーンがあつたようななかつたようだ。

忘れちゃつたけどどうだったかな。

頭の中でそんな事を考えていると、なのはが妙な事を言いだした。

「で、これからなんだけどコーノ君とフロイトちゃんは学校に行く事になつたから」

「ちょっと待つてよ！ 何で俺が学校に」

「だつてお母さんが行かないならこの家から追い出すとかいうんだもん」

「それなら出た方がマシだ」

「ちなみに手続きは今日のうちに済ませますだつて

あまりの勝手な出来事に、俺はバタンと地面に寝転がる。でもなんか楽しそうな表情のなのはがいた。

何が嬉しいんだ？

「なのは、何でそんなに楽しそうなの？」

「だつてユーノ君と学校に行けるし」

「学校に行つても俺、友達とか作る気ないよ？」

「大丈夫だよ。私の友達を紹介してあげる」

なのはの友達つてのはまさか、アリサ・バーニングス、月村すずかですか？

なのは世界に居るんだし、ちょっと会つてみたいなあ。

会つたためにはなのはに紹介されなければいけないな。

学校行かなくても会えるかもしれないけど、ジュエルシードや色々やる事あるから学校の方が良いか。

そんな事を考えていると、あの声が聞こえた。

その2人に会い、萌え力を高めよ

そんな一言が脳に響いたのはいいが、萌え力って何だよ！？ 後、心読むなよ。

そういえば、俺が萌え力なんぢゃら言つてたな。

今は謎の声の言つ通りにするか。聞かなかつたらどうなるかわからん。

「……仕方ない。いくよ」

「ユーノ君と学校生活かあ。楽しみになつてきた」

「うん、そうだね」

制服とかきつと俺の部屋に行つたらあるんだろうな。

学校行くぐらになら出て行きたいけど、付いてこられるのも面倒だ。でもさ、楽しそうに笑つてるなはとフェイドを見るとまあいつかつて気持ちになる。

あまり自由に行動できなくなつたつて事は仕掛けだけはしこないといけない、か。

「僕は自分の部屋に戻るよ」

「夕御飯になつたら言つね」

「うん」

なのはが頷いた事を確認した俺は、フェイドの部屋を出て自分の部

屋に入る。

部屋に入ると、綺麗に掃除されていた。

「やつぱりあるのか

ハンガーで掛けられた小学生の制服がポツンとあった。溜息を吐いた俺はベットに体を預けるように寝転がる。

「この分だと八神はやてと会つのも時間の問題か」

もはや原作と違うのか、修正力で出来事だけを同じにされるのか？
それは誰にもわからない。

「スパロボ系の能力を使えるのは良いけど、オリジナル系しか使えないのかよ！」

頭に思い浮かぶのは全部オリジナル系の能力ばかりだった。
どこにもロムさんの技や冥王の技などなかつた。

「ああ、ヒートポンドとか言いたかつたなあ

そんな愚痴を漏らしていました。

next

第3話『学校転入となのはの友人に会つ』へ

第2話『フューハイトと接触』（後書き）

アニメだとどうの話になるんだろうか？

時間軸自体が狂っているので気にする必要はないです。
なのはとフューハイトとアルフは…… 者です。

感想などお待ちしています。

次の更新、3話目は全ての終焉36話公開後になります。

設定『現在2話まで』（前書き）

設定だけなので、飛ばしてくださっても構いません。
短いのはまだ2話だから。

設定『現在2話まで』

1話に出てきた謎の声は神様ではありません。
なぜ、この少年が選ばれたのかわかります。

永遠の能力：不明。物語の鍵

・阿木坂千歳
ユノ・スクライア

元19歳の大学生。現在、ユーノになっている。

元の世界が消滅してゐるため、元の世界に戻る事が出来ない。

能力

スパロボ・オリジナル系の能力。（今の所、デバイスの能力のみ）

ドラゴンボール系の能力。（使える能力は不明）

ディスガイア系の能力。（使える能力は不明）

天地無用！ 魁皇鬼の能力。（使える能力は不明）

永遠の力（何一つ不明）

使つた技。

ワームスマッシュヤー

マイクロブラックホール

紫の結界

デバイス：レイジングエターナル

見た目はなのはのレイジングハートをベースにしたデバイス

名前は謎の声の言つていた言葉を入れただけ。
グランゾン・アストラナガン系の能力となのは世界の全能力を使える。

・高町なのは

デバイス・レイジングハート

使える技。

アクセルシューター

スター・ライトブレイカー

実は　者で、魔力も原作以上の質量を持つ。
ユーノに対しての態度が女の子？みたいな感じ。

・フェイト・テスタロッサ

デバイス・バルディッシュ

使える技。
サンダー・レイジ

なのはと同様。

ユーノの提案？で、なのはの家に居候する事になった。

・アルフ

フェイトの使い魔で、　　者。

ユーノに対して妙な態度を取る事になる。

設定『現在2話まで』（後書き）

次の更新（第3話）は全ての終焉36話更新後です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0681m/>

永遠の力を持った現実憑依者

2010年10月20日09時29分発行